

株式会社 アルバック

2020 年度第 1 四半期決算説明カンファレンスコール（2020 年 11 月 13 日開催）

およびアナリストミーティングの主な質疑応答（サマリー）

【1Q 実績】

① **1 Q（7 月～9 月）の受注高・売上高・利益率の実績は低水準だったが、期初想定通りだったのか？年間計画に変更はないのか？**

A：当初から受注高については、1 Q は低めで 2 Q から回復基調となり、さらに下期は上期よりも改善すると想定していた。売上高は受注高減少に伴い、減少したが、2 Q からは受注高の回復とともに改善していく見込み。営業利益率の低下は売上高減少の影響が大きく、売上高回復、半導体・電子・コンポーネントなど利益率の高い売上割合の上昇、モノづくり改革の成果等により改善していく見込み。
受注高 1,800 億円・売上高 1,650 億円・営業利益 150 億円の通期計画に変更はない。

② **1 Q の FPD および半導体電子部品の受注高・売上高の用途別内訳は？**

A：別紙のとおり。

③ **1 Q の営業利益率の順位は？**

A：別紙のとおり。

【FPD 受注動向】

④ **FPD の 1 Q 受注は低水準だったが、2 Q、下期にはどのような案件が予定され、計画達成できる見込みなのか？ FPD 受注の年間計画 470 億円は達成可能なのか？**

A：2 Q には中小型 OLED 向けスパッタリング装置の受注が予定されている。加えて、新型コロナウイルスによる巣ごもり需要等により PC や TV 向け LCD のパネル需要・価格が上昇しており、パネル生産増強のためのチャンバー等の追加投資も見込んでいます。

また、下期には、大型 TV 用 LCD のスパッタリング装置、中小型 OLED の蒸着装置・スパッタリング装置などの受注を予定しており、年間計画 470 億円は達成可能と考えています。

⑤ **中小型 OLED 向けスパッタリング装置の競争が激しくなっていると聞かすが、競争状況・受注状況について教えてください。**

A：競合他社は価格面で攻勢をかけてきていた。昨年度より、OLED の高精細化要請が強まりはじめ、当社の低パターナル技術が再評価され、シェアが高まってきており、今期も受注を予定している。

⑥ **来年度以降の FPD の受注見込みは？ LCD、中小型 OLED、大型 OLED の受注動向は？**

A：大型 LCD 向けについては、基本的に投資が一段落すると考えているが、巣ごもり需要等により LCD のパネル需要・価格が上昇している中、中国メーカーの中には LCD 増産に向けた追加投資を検討する動きもあると聞いている。

中小型 OLED 向けについては一時期のように各社が集中的に投資をしている状況ではないが、各社の投資は継続すると認識している。

大型基板 OLED については、韓国・中国それぞれのパネルトップメーカー 2 社を中心に、来年度以降、投資が活発化してくると期待しており、当社の大型装置での強みを十分発揮できると考えている。

【半導体電子 受注動向】

⑦ 半導体電子の 1Q の受注が低水準だったのはなぜか？ 2Q 以降は回復するのか？ 来年度以降は？ 半導体、電子それぞれについて教えてほしい。

A：半導体の 1Q は一時的な投資の端境期で当初より商談が少なく受注水準が低いと見込んでいた。2Q 以降はメモリ・ロジックともに受注が回復し、通期では前年同期を少し上回る水準を見込む。

ロジックの EUV 活用に伴うメタルハードマスク工程への新規参入を足掛かりに、ファウンドリーやメモリメーカーとの共同開発案件が増加しており、来年度以降の成長に向けた足場固めも進んでいる。

中国のパワー半導体や 5G 関連の投資が活発化してきたものの、中国への渡航制限により、1Q での受注には至らなかったが、2Q に入ってエンジニアが渡航できるようになり商談も本格化してきており、2Q 以降の受注増加を見込む。

中国はエレクトロニクス分野全体にわたる国産化を強力に推進しており、地方政府は様々な支援をしながら企業・工場誘致を進めている。今後も中国のエレクトロニクス関連の投資の活況は継続するものと思われ、ビジネスチャンスは大きいと考えている。

⑧ EUV 活用に伴い新規参入したロジックの今期受注見込みと来期以降の成長について教えてほしい。

A：EUV 活用に伴うメタルハードマスク工程のスパッタリング装置は、ファウンドリー 2 社で採用されている。今後、更に微細化が進むと EUV 工程とともにメタルハードマスク工程＝スパッタリング工程も増加する。メタルハードマスク工程で実績を積んだことで、他の新たな工程でもセカンドベンダーとして期待してもらえるようになり、最先端工程の共同開発に取り組んでおり、来年度以降に成果が表れてくると考えている。

⑨ PCRAM の投資動向は？

A：電源が切れてもメモリ（記憶）が残る NAND とスピード処理可能な DRAM の機能を兼ね備え、低消費電力化も実現する PCRAM に対する期待は高い。最先端ロジックメーカーの本格投資は来年度以降に実現すると見込んでいる。一方、他のメモリメーカーは PCRAM 市場が立ち上がった際、供給できるよう、量産開発に取り組んでおり、すそ野が拡大してきている。今期はこうした量産開発用の装置の受注等を予定している。

⑩ パワー半導体を含む電子関連の投資動向は？ 中国市場のエレクトロニクス関連の投資動向は？

A：パワーデバイスは日本、中国とも活発化している。中国では、政府の国産化推進・地方政府の支援・誘致活動等もあって、パワー半導体のみならず、5G に関連した通信・センサ関係などエレクトロニクス関連の幅広い分野、幅広い地域で、数多くの投資の話が出てきている。2Q に入って、部長級のエンジニアが複数名、中国現地入りし、商談も本格化しはじめており、受注も増加すると考えている。

【コンポーネント受注動向】

⑪ コンポーネントの1Q受注は低かったが、2Q以降の回復は何が増加するのか？

A: 1Qは、自動車関連の設備投資延期やFPD関連のクライオポンプ案件が少なかったことなどから、コンポーネントの受注は低水準だった。2Q以降は、OLED関連のクライオポンプの大口案件を予定しており、半導体電子関連の設備投資回復に伴う真空ポンプなどの段階的回復も見込んでいる。

【利益率】

⑫ 真空応用事業が営業損失となっているのはなぜか？2Q以降回復するのか？

A: 1Qは、売上が低下したことに加え、主に材料関連で利益率の高い受注が一時的に減少したため、営業損失となった。2Q以降は売上回復により黒字化する見込み。

⑬ 1Qの売上総利益率は低めだが、年間計画は達成できるのか？

A: 1Qは、売上高が低水準だった影響が大きく、売上総利益率は25.7%となった。

2Q以降、①売上高回復に伴う利益率改善、②利益率の高い半導体・電子、コンポーネントの売上比率増加（ミックス改善）、③モノづくり改革による利益率の改善（徐々に実現）により、利益率は改善する見込み。

以上

〈別紙〉

品目別実績・予想 内訳割合・営業利益率順位

●受注高 品目別の内訳割合

受注高	2020年度1Q
FPD	54億円
・LCD	4割強
(大型向け割合)	(ほぼ大型向け)
・OLED	約4割
・その他	2割弱
半導体電子	87億円
・メモリ	2割半ば
・ロジック	1割弱
・電子部品	4割強
・パワー半導体	2割弱
・実装	1割弱

●売上高 品目別の内訳割合

売上高	2020年度1Q
FPD	121億円
・LCD	2割半ば
(大型向け割合)	(大型向け8割)
・OLED	5割強
・その他	2割強
半導体電子	78億円
・メモリ	4割強
・ロジック	一桁台半ば
・電子部品	2割強
・パワー半導体	2割強
・実装	約1割

●営業利益率順位 2020年度1Q実績

順位	品目
1	一般産業
2	コンポーネント
3	FPD
4	半導体電子
5	その他
6	材料

全社平均利益率は
3)FPDと4)半導体電子との間